場所　新潟県長岡市

面積　3.19ha

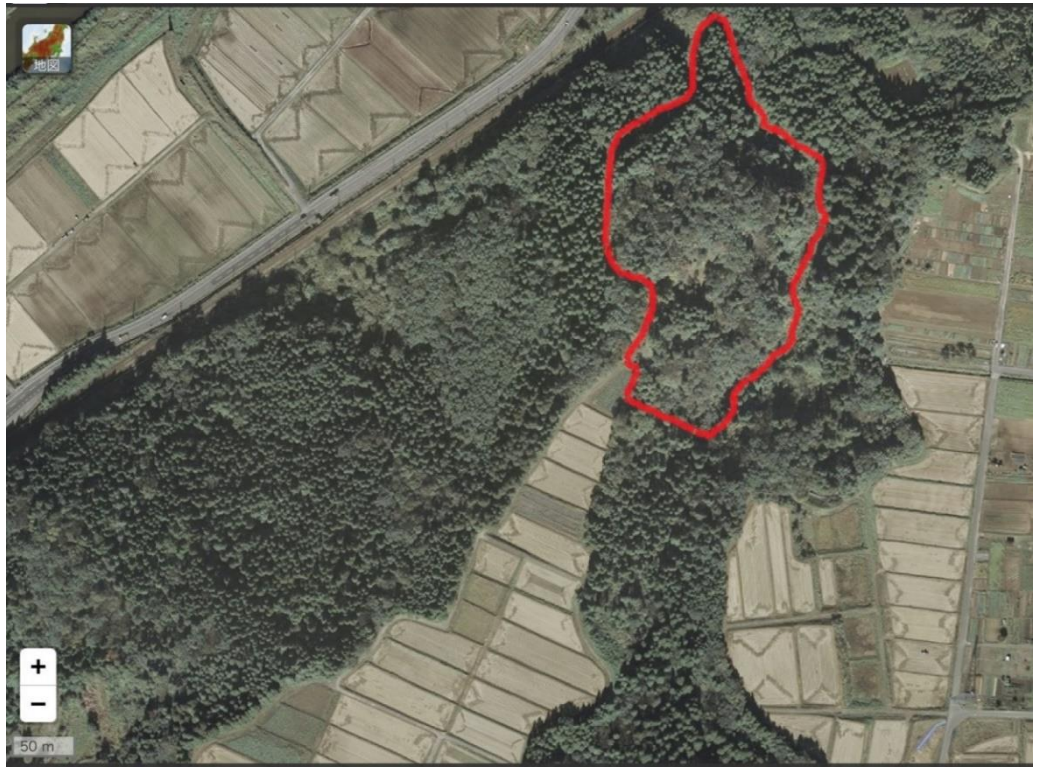


活動目的　サイトに生育・生息する動植物の目録づくりとモニタリングにより、生物多様性の構成要素を記録するとともに、生物相の長期的な変化を把握する。またサイトの管理、整備を通じて、一般市民に対して自然観察の場を提供することにより里山環境の重要性を理解してもらう。

サイト概要　新潟県長岡市の朝日集落に近い里山であり、標高30m～86m、総計3.19haである。サイトの中心を占める小高い丘は、上杉謙信の跡目争いの御館の乱で、景虎側を助勢した七寸五分（くつわだ）氏の居城跡とされている。サイトの大半は、コナラ、マルバマンサク、ウワミズザクラ、エゴノキなどが優占する二次林である。林床は、新潟県の低山帯に特徴的な常緑広葉樹のユキツバキが優占する。草本層には、ショウジョウバカマ、オオイワカガミ、カタクリなどが多く見られる。なお、朝日城址を示す標柱がN37度23分37.2秒、E138度46分9.4秒の位置にある。2005年に申請者である（公財）こしじ水と緑の会の所有となった。

土地利用の変遷

サイトは越路原と呼ばれる台地状の丘陵地の北端部に位置している。越路原の多くは根菜類や桑などの畑地であったが、1960年代になり、近隣河川の渋海川からポンプで水が汲み上げられ、広大な水田に代わった。サイトの朝日城址を中心とした平坦地は畑であったが、耕作が放棄され、草地状になっている。広葉樹林は、薪炭用に定期的に伐採されていたが、1960年代の燃料革命以降利用されておらず、放置されている。そのため、樹高や胸高直径が大きくなっている。



サイト周辺の環境

サイトの東側境界に沿って、小河川の権ケ沢（ごんがさわ）が流れている。この沢は湧水を水源としていたが越路原の水田化により用水が流入するようになった。周辺は主としてスギ人工林で、すべて個人所有である。なお、水田が南側に存在する。

アピールポイント

サイトを含む一帯は、広葉樹林とスギ人工林からなっており、広葉樹林は、コナラが優占し、林床にはユキツバキが広範に見られるなど、多雪地の低山帯に特徴的な植生である。集落からのアクセスが容易であり、自然観察などに適した場所である。サイトの一部はモニタリング1000の植物調査、鳥類調査の対象地であり、モニタリング体制が確立している。

生物多様性の価値

価値（3）里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【場の概況】

サイトの標高は30～86mで、植生は主に広葉樹林、スギ人工林、草地からなる。多雪地域の低山帯の二次林に特徴的な植生を有するとともに、里山に典型的な動物が生息する。サイトの東側の境界沿いを沢が流れているため、水辺の鳥類も見られる。近年、ニホンカモシカも棲みつくようになった。

【主な植生】

コナラ、マルバマンサク、エゴノキなどからなる落葉広葉樹林、スギ人工林、草地が存在する。広葉樹林の林床には、常緑広葉樹のユキツバキ、エゾユズリハ、ヒメアオキが密生し、草本層としてはショウジョウバカマ、カタクリ、オオイワカガミなどが多く見られる。植生区分上ブナクラス域の下部に位置する。

【確認された主な動植物など】

哺乳類：ニホンタヌキ、アカギツネ、ニホンリス、テン、ニホンカモシカ、ノウサギ
鳥類：サシバ、サンコウチョウ、サンショウクイ、クロツグミ、センダイムシクイ、メジロ、キビタキ、オオルリ、エナガ
両生類：ニホンアカガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエル
爬虫類：ニホンカナヘビ
昆虫：ルリタテハ、アサギマダラ、オニヤンマ
植物：キハダ、ヤマナラシ、コナラ、クリ、マルバマンサク、カタクリ、トキワイカリソウ、キクザキイチゲ、ユキツバキ、エゾユズリハ、ヒメアオキ、タニヘゴ、アズキナシ、ナニワズ、カスミザクラ、オクチョウジザクラ、オオイワカガミ、ナガハシスミレ、マキノスミレ、キタコブシ



写真の説明：サイト内で目撃されたニホンカモシカ。

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

サイトの全域。集落の近隣に位置しており、主に、かつての薪炭林としての広葉樹二次林とスギ人工林から構成されている。朝日城址周辺の平坦地は草地となっている。

【確認された希少種】

これまでの調査により、環境省レッドリスト2020掲載種として、鳥類4種（サシバ、オオタカ、サンショウクイ、ノジコ）のほか、アカハライモリなど、希少な動植物種7種の生息・生育が確認されている。



写真の説明：サシバ。サイト近くで撮影。

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容

＜活動目的＞
サイトに生育・生息する動植物の目録づくりとモニタリングにより生物多様性の構成要素を特定し、長期的な変化を把握することを通じて、生物多様性の保全に貢献する。また、サイトの維持管理を通じて、一般市民に対して自然観察の場を提供することにより、里山環境の重要性を理解してもらう。

＜活動内容＞
主に植物と鳥類を中心に、動植物相の目録の整備を継続する。管理用車道を維持するために、定期的に侵入植物の刈り払いや降雪による倒木の処理を毎年実施する。林内の自然観察路が灌木の伸長により、歩行の障壁となることからその都度、伐開・整備する。

＜実施体制、計画の点検・見直し＞
（公財）こしじ水と緑の会が活動の主体となり、調査および諸管理をおこなう。活動計画および活動実績は、（公財）こしじ水と緑の会の理事会の場で毎年１回報告し、必要であれば見直しをおこなう。

モニタリング計画の内容

【モニタリング対象】
主として植物と鳥類を対象とする。そのほかの分類群についても、確認時に種名を記録する。

【モニタリング場所】
出現種についてはサイト全域を対象とする。樹木の毎木調査は朝日城址の標柱周辺に設定した10m x 10m方形区49か所で実施する。

【モニタリング手法】
方形区49か所については、胸高直径5cm以上の樹木の胸高直径を測定し、樹種ごとの基底面積を算出する。鳥類は、目視と鳴き声により種名を同定する。

【モニタリングの実施時期及び頻度】
植物の出現種名は無雪期に原則として毎月実施する。鳥類は、春期と秋期に定点観察を1回ずつ行う。

【モニタリング実施体制】
（公財）こしじ水と緑の会の職員が中心となり、有識者（森林総合研究所所長の中静透博士、元岩手県立大学教授の金子与止男博士、その他）の協力を得るものとする。なお、ここに挙げた有識者は両名とも（公財）こしじ水と緑の会の理事。